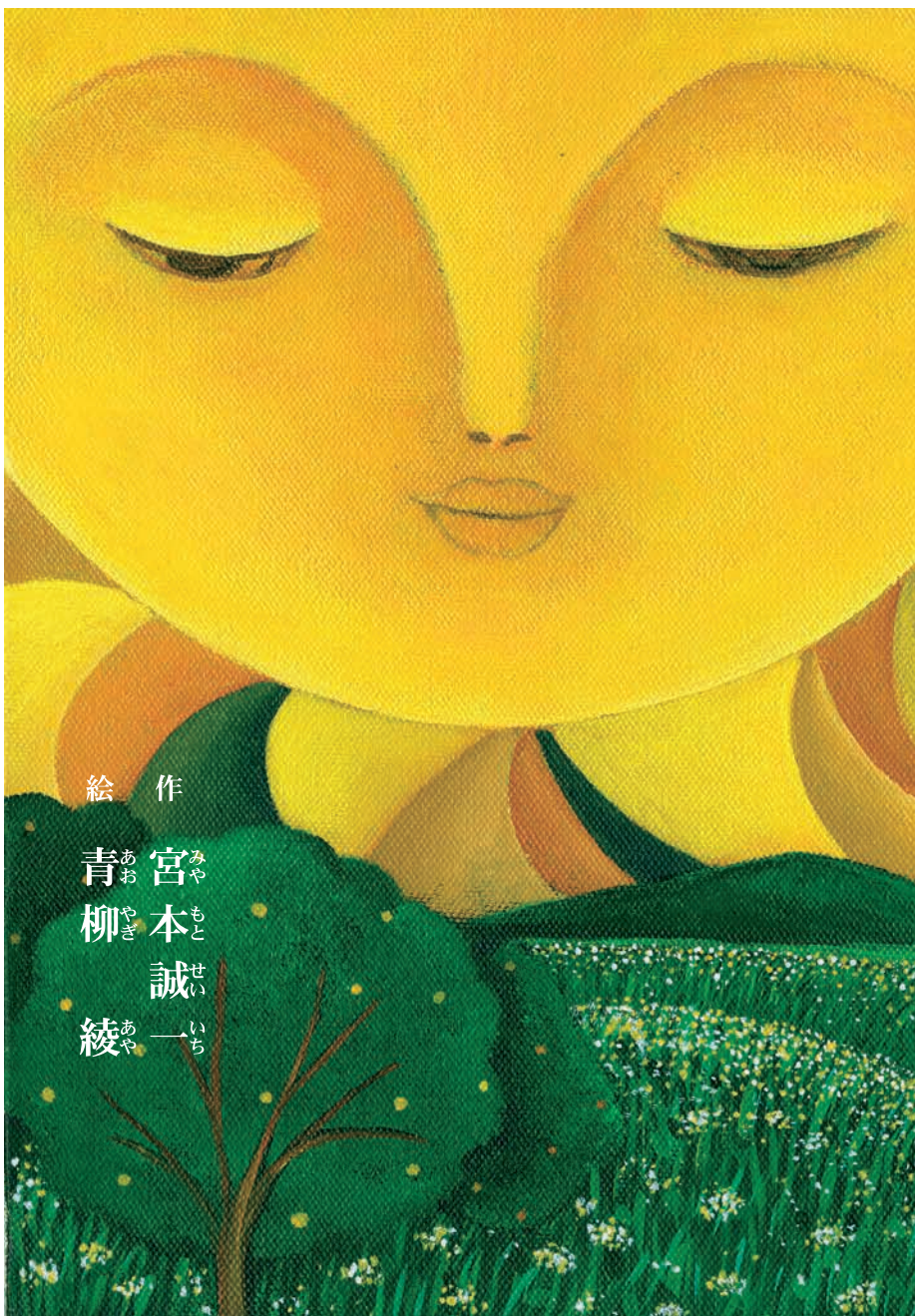


# お月さまとゆず



絵 作

青柳 宮本

綾 誠

綾 一



# お月さまとゆず

作 宮本 誠一  
絵 青柳 綾

ここは、いつものダム湖の上。

あのかがみのような水面にうつつて、ときどきゆれているのがわたし。

とつてもきれいでしよう。

あつ、今夜もわたしのすぐそばで、

夜づりをしている人がいる。きつと、

わたしの光にさそわれてあつまって

くる魚たちが、お目当てね。





ここにこうしてじっとし  
ていると、ふくろうのなき  
声こゑや、風かぜにゆれるササの葉は  
ずれの音おとが、聞きこえてくる  
わ。前まえは、そんな音おとにまじっ  
て、子こどものかわいい声こゑが  
きこえてきたものよ。

あれはいつだったか。

三つくらいみっの女の子おんなこが、おふろか

らあがったばかりのお父とうさんに、

「父とうさん、あのお月つきさまとつてえ」

って言いったの。ひたいに、あせの

つぶをたくさんつけたお父とうさんが、

はしごをいくつも、いくつもかけて、

すぐそこまでやってきたのには、びっ

くり。大きおおなゆびで、今いまにもつかま

れそうで、ドキドキしたわ。

その子こは、まってるあいだ、楽たのし

そうにうたいだしたの。

ひとつ ひかるは おつきさま

たなだをのぼって いきまする





そうそう、べつの日には、  
小さな男の子が、わたしの  
方をじっと見ていたかと思  
うと、

「お母ちゃん、あのお月さ  
んに、しやうゆをかけて、  
たまごごはんにしたい」  
お母さんは、ニッコリわ  
らって、たまごをわってつ  
くってあげてたっけ。



あら、あれはなにかしら。わたしのまわりに。ふかふかういている、あの黄色い玉。

ああ……ゆずね。

だんだん畑の上の方に、一本だけのこったゆずの木が、まい年、まい年たくさんの実をつけるの。そして、今ごろポトンポトンとおちていく。

もうすぐ春なのね。そういえば……。





ひなまつりが近づくと、村の人たちは、ゆずの皮をすって、ゆずもちをつくっていたつけ。子どもたちは、小さな手でうすい黄色のゆずもちをまるめて、おひなさまにおそなえしたりしてた。ゆずのいいかおりが、わたしのところまでとどいたわ。

ふたつ ふえるは ゆずのみよ  
ゆべし ゆずもち ゆずごしよう





あの、かわいい子どもたちも、  
すつかり大きくなつたことですよ  
うね。毎夜、つりをしている若  
者たちのように。

そういえば、魚はつれたのか  
しら？

「ああつ、ますい！ にげやがつ  
た」

ボートの上で人かげがうごい  
たみたい。

どうやら、口から針をとろう

としたとき、とりにがしてしまつ  
たようだわ。きようは、魚は一

匹もつれなかつたようね。ポー  
トは、オールの音をのこし、み  
んな引き上げていった。

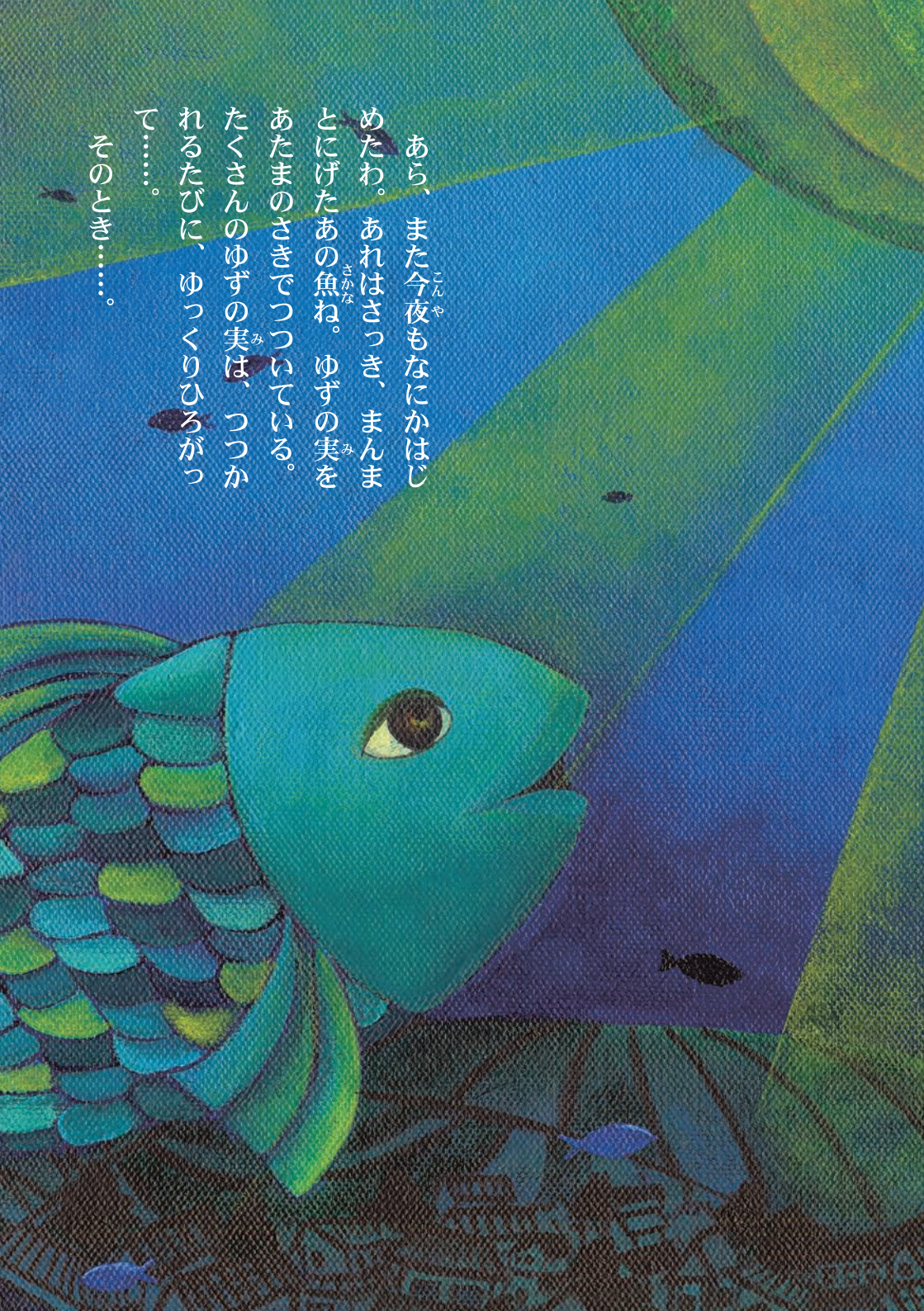


だれもいなくなつたダム湖には、わたしと  
ゆずの実だけ。

こうしてまた、まっくらな水面を見ている  
と、思い出すのは、やっぱりあの夜のこと。

そう、小さな村から、ひとつ、またひとつ、  
家の光が消えていった。わたしがいくら照ら  
しても、村は、くらくなるばかり。

やがて、道や畑、家まで、みんなダムにし  
ずんでしまった。ときどき魚たちがつくる水  
のわが、まるでわたしのこぼしたなみだのよ  
うに見えたものよ。でも、魚たちは、そんな  
わたしの気持ちを知っているかのように、と  
びはねて、くるりと宙返りしたり、ゆずのた  
ねをのみこんだかと思うと、ぷつとはぎだし  
たりして、わたしをわらわせてくれた。



あら、また今夜もなにかはじ  
めたわ。あれはさつき、まんま  
とにげたあの魚ね。ゆずの実を  
あたまのさきでつついている。  
たくさんのゆずの実は、つか  
れるたびに、ゆっくりひろがっ  
て……。

そのとき……。





わたしは、自分の目をうたぐった。

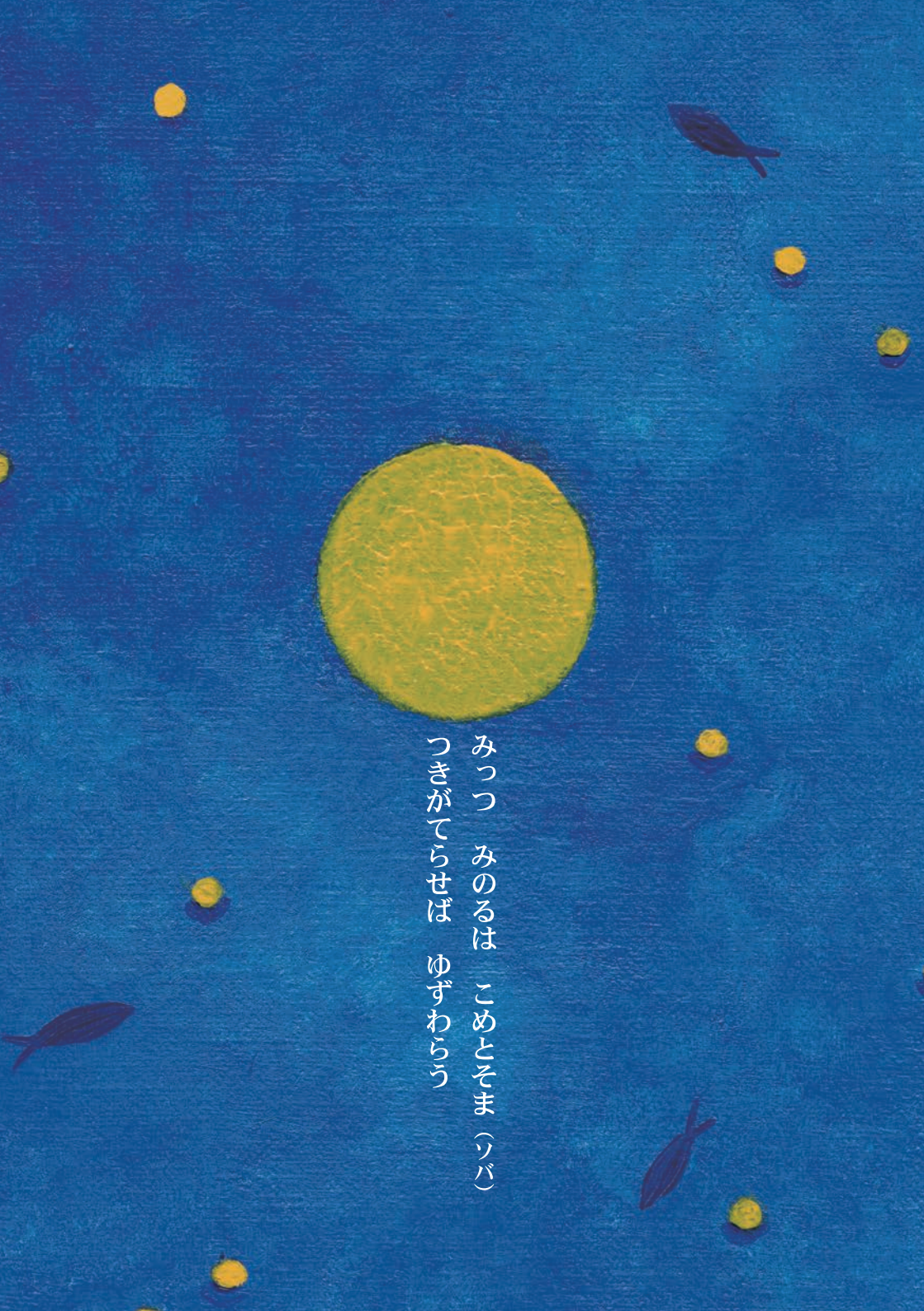
一面にひろがったゆずのあいだに、いつか  
しずんでしまっただんだん畑が見えるじやな  
いの。道も、庭も、家も……。

あの日、お父さんが、はしごをかけたあの  
屋根も、たまごごはんをつくったお母さんが  
立っていた台所も、ゆずもちがそなえられて  
いたひなだんも。

「父さん、もう少しでお月さまにとどくよ」

「お母ちゃん、たまごごはん、おいしいね」

そして、あの歌のつづきもきこえてきたわ。



みつつ みのるは こめとそば(ソバ)  
つきがてらせば ゆずわらう



### 【著者略歴】宮本 誠 一（みやもと・せいいち）

---

地域活動支援センター「夢屋」代表。

1961年熊本県荒尾市生まれ。学習塾、大検専門予備校職員などを  
経て、熊本県小学校教諭に採用。2校目の赴任地（阿蘇市立宮地  
小）での発達障がいの青年との出会いをきっかけに33歳で退職、  
小規模作業所「夢屋」を開所。阿蘇市からの委託を受け、現在に  
至る。

運営の傍ら創作活動を続け、『真夜中の列車』（1998）『水色の川』  
（1999）『涅槃岳』（2008）『游人たちの歌』（2009）で部落解放文  
学賞。『ウォール（壁）』（1998）で熊本県民文芸賞、『お月さまと  
ゆず（本作）』（2004）で家の光童話賞優秀賞、作品集として『ト  
ライトーン』（2006）。今回のブックレットは『游人たちの歌～あ  
る自閉症の青年らと生きて～』（2010）『往生岳の麓にて～障が  
い者作業所から見た本と時代の風景～』（2011）に続き3号目となる。

### 【挿絵】青柳 綾（あおやぎ・あや）

---

1976年熊本県熊本市生まれ。2003年から県内各地で個展を開く一  
方、東京にも拠点を移し、オリジナルワインラベル公募で田村賞  
と最優秀賞受賞。その後帰熊し、2011年には、阿蘇白水郷美術館  
で「SHIELRY」展、また白水中学校生徒と『想いをカタチに』  
を共同企画。著者とは小説作品集『トライトーン』で表紙を担当  
して以来、2度目の顔合わせ。

### 【帯文】丘 修三（おか・しゅうぞう）

---

1941年熊本県甲佐町生まれ。大学で障がい児教育を専攻後、養護  
学校教諭を経て作家となる。『ぼくのお姉さん』（1987）で、日本  
児童文学者協会新人賞、坪田譲治文学賞、新美南吉文学賞、『少  
年の日々』（1993）で小学館文学賞、『口で歩く』（2001）で産経  
出版文化賞（ニッポン放送賞）受賞。最近作に『生きる』『黒ね  
こガジロウの優雅な日々』などがある。



# お月さまとゆず

平成二十五年二月十一日 発行

発行 NPO 夢屋プラネットワークス

代表 宮本誠一

〒八六九一三三四 熊本県阿蘇市蔵原六二六

TEL・FAX 〇九六七―三四―〇二二三

E-mail [aso.yumeya@lemon.plala.or.jp](mailto:aso.yumeya@lemon.plala.or.jp)

<http://www.asoyumeya.org/>

著者 宮本 誠 一

挿絵 青 柳 綾

印刷 (株)かもめ印刷

定価 一〇〇〇円 (税込)

